うちのまち

vol.07

加悦小学校で聞いた歌声が
頭の中から離れない。
人はなぜ歌をうたうのだろう。
歌はなぜ心を揺さぶるのだろう――。
答えを探して、耳を澄ませた。

文・安部拓輝

とどけ、この歌。

「はっ、はっ、はっ、はっ、はー」。5年生は音楽室であおむけに寝転び、おなかに手をあてて発声練習をしていた。あごを引き、のどを開いておなかから息を出すのだ。床から天井に力強い声が湧き上がる。「その感じで立って声を出そう」。学級担任の井上幸夫さん（37）は子どもたちに呼びかけた。

加悦小では、いつもどこからか歌声が聞こえる。合唱を通じて表現力を伸ばそう――そんな取り組みを始めたのは2011年。府教育研究会の研究協力校になったことがきっかけだった。教職員はあの手この手で工夫をこらした。階段や廊下にはフォルテやアクセントなど音楽記号のクイズを張ってある。下校の音楽も自分たちの歌声。歌う前にはオリジナルの準備体操があって、寝転んで発声練習をするのも特徴的だ。低学年では「きれいに歌う」ことを心がけ、高学年になると歌詞の意味や歌の強弱を考えて楽譜に書き込んでいく。

子どもたちが地域を舞台にデビューしたのは14年。近くの特別養護老人ホーム「やすらの里」で発表すると、静かに耳を傾けていたお年寄りが、眼鏡の下に指を入れて涙をふき始めた。歌の技術だけではない「心に届く歌」が、いつのまにか出来上がっていた。合唱の専門家も「全国どこに出しても恥ずかしくないレベル。小学生をどうやってここまで歌えるようにしたんだ」と驚く。学校に「もう一度聞かせてほしい」と願う声が相次ぎ、子どもたちの自信になった。

歌が上手になるにつれて子どもにも変化が現れた。じっとしていられずコミュニケーションが苦手な子も、合唱の時は一緒に頑張れる。音に敏感な子も耳をふさがずに歌っている。音がきれいだからだ。合唱を通じて、みんなで一つになれる時間が生み出せつつあった。

◇

学習発表会まであと1週間。4、5年生49人は体育館でリハーサルに臨んだ。

♪いつか会えたなら　ありがとうって言いたい
遠く離れてる君に　頑張る僕がいると
（作詞・作曲：山崎朋子「大切なもの」より）

井上さんはピアノを止めて、子どもたちに問いかけた。「みんなは『ありがとう』って誰に伝える?」。天井を見上げ、しばし考える子どもたち。「伝えたい人を思い浮かべて、優しく語りかけてみよう」。井上さんの言葉に、子どもたちは照れ笑いしながらうなずいた。

本番。観客席の両親や祖父母に向けて、子どもたちが問いかけた。「あなたの本当に大切なものは何ですか? 思い出? 宝石?」。思いを巡らせる大人たちに、語りかけた。「楽しいことや悲しいことを伝えたい誰かがいる。それこそが僕たちの大切なもの――」

歌の言葉に思いをのせた合唱が始まる。澄んだ歌声だけではない何かが体育館を包み込んだ。客席のあちこちに目頭を押さえる姿が見える。「人をこんなふうに思える子になったら……。心が洗われるって、こういうことなのでしょうね」。4年生の小林達樹さんの祖母陽子さん（73）は、涙をこらえきれずにいた。歌が胸にしみこむ。気がつくと私はカメラを構えるのも忘れ、聴き入っていた。「大切なものに気づかない僕がいた。いま僕の中にある温かいこの気持ち」。歌詞を自分と重ね合わせながら、私も歌を口ずさんでいた。

ステージの前に座る下級生も、一緒に体を揺らしていた。2年生の谷口沙弥さんは「私もあんなふうに歌いたい」と思った。上級生はあこがれの存在。発表会の最後には小さな子どもたちも一緒に、体を揺らしながら合唱した。

のびのび歌う子どもたちのそばで、杉本淳校長は新人時代を思い出した。杉本さんは30歳の頃、同じ加悦小で学級担任をしていた。難しい家庭環境の子もいた。仲間と学ぶ楽しさを伝えたくて、杉本さんは教室にギターを持ち込み、音楽の時間に子どもたちが好きな曲を一緒に歌った。授業の終わりに「これでおしまい」とギターを置くと、「先生もう一回! 頼むよ先生」とせがまれた。手をたたき、足を踏みならして歌う子どもたち。計算が苦手でも漢字が覚えられなくても、音楽の時間は楽しさを全身で表現してくれた。「あの時間を終わらせたくなかった。僕もやめられませんでした」

学校っておもしろい。居心地がいいな。そう感じてもらえる教室を、歌の力で創り出したい――。30年前に思い描いた理想を今、若い教師が進化させている。杉本さんは「のびのび歌えるのは安心できる仲間に囲まれているから。日常の学校生活の中に心を開放できる時間を生み出せていることが、本当にうれしい」と語った。

◇

それにしても、加悦小の子たちはなぜこんなに歌がうまくなったのだろう。指導した井上さんは音楽教諭とはいえ打楽器が専門。誰から学んだのかと尋ねると、町内に手本とした人がいるという。その人は石川混声合唱団の指導者。井上さんが打楽器の助っ人として演奏会に出演した際、ひそかに指導法を見習ったというのだ。どうもその「師匠」、ただものではなさそうだ。私は石川混声合唱団の練習に向かった。

【裏面へ続く】

スマホやテレビで聴いてみよう

加悦小の歌声を聴きたい人は左のQRコードからどうぞ。与謝野町有線テレビでも1月24日20時から放送されます。与謝野町小中学校音楽フェスティバルで4、5年生が歌った「心から心へ」などを聴くことができます。

TAKE ACTION
YOSANO BRANDING

左・詳細な注釈で埋め尽くされている、成毛さんの楽譜。孤独に譜面と向かい合う地道な準備が、心に響く音楽を支えている。右・先輩たちの偉業の記録が刻まれた音楽室で歌う、加悦谷高校合唱部。合唱からアカペラへ。形は変わっても音楽への情熱は同じだ。下・指揮者の指示を見逃すまいと目を凝らす、石川混声合唱団の団員たち。ひたむきに、緻密に紡ぎあげた音が魅力的だ

白髪の男性が両手を上げた。
その瞬間、合唱団全員の目と心が、彼の指先と結ばれる。
それを確かめ、彼はしなやかに手を振り下ろす。
さあ、音楽の時間の幕開けだ。

半世紀まいた歌の種

♪私のこころはどんな色 ──。たくさんの聴衆でうまった宮津会館に、谷川俊太郎の詩がメロディーと共に響き渡る。美しく繊細な女声と、力強い男声。交互に、そして一緒に。折り重なりながら詩の心を歌い上げる。石川混声合唱団の「春うららコンサート」は、ちょうど満開を迎えた桜の花と競い合うように、華やかさを増していった。

硬派な合唱曲が終わると、正義の味方らしい歯切れの良さでウルトラマンメドレーが歌い上げられ、聴衆を和ませる。そして最後は大曲、モーツァルトの「戴冠（たいかん）ミサ」。まさに合唱のフルコースだ。年に一度のコンサートを楽しみにしている人が多いというのも、大いにうなずける。

その中心で、合唱団をまとめるのが指揮者の成毛敦さん（70）。加悦小学校の音楽教諭、井上幸夫さんがひそかに「合唱の極意」を学んだ大先輩だ。

加悦谷高 5年連続で全国制覇

成毛さんは加悦谷高校の元音楽教諭。顧問として加悦谷高合唱部を率い、全日本合唱コンクール5年連続全国1位、シューベルト国際合唱コンクール総合1位4回などの成績をおさめ、全国の指導者が目標にした「加悦谷の歌声」を作り上げた。いわば、合唱界のレジェンドだ。

世界が認めた合唱はどうやって創り出されたのか。私は石川混声合唱団の練習を訪れた。金曜の夜の石川小学校音楽室。指揮者用の譜面台に成毛さんの楽譜があった。よく見ると、蛍光ペンや赤鉛筆で何やら注釈が書き込まれている。音の大きさ、和音名、アクセント、ブレスのタイミング、音の受け渡し……。何十ページにもわたって、独自の音楽解釈で埋め尽くされている。成毛さんは小学生用の小さな机にちょこんと腰掛け、その楽譜に目を落とした。見た目は普通の70歳。ちょっとこわもてのおじいさんといったところだ。

一呼吸すると、成毛さんが両手を上げた。その瞬間、眼鏡の奥のまなざしが鋭く光った。音楽室の空気が張り詰める。成毛さんが腕を振り下ろし、団員が口を開くやいなや怒声がとんだ。「そんな声ではだめだ! のどで歌うな。息を使え。息の量で声の大きさを作るんだよ!」。何度も曲を止め、身ぶり手ぶりを交えた厳しい指示がとぶ。「そこはクレシェンドだ。音を頭の上に抜け!」。この音楽室は狭すぎるとばかりに低い声と高い声が共鳴して部屋中に響き渡った。

鬼気迫るとよく言うが、指揮をする成毛さんは確かに鬼のようだった。衰えない音楽への情熱が、彼を鬼にしている。マエストロ。偉大な指揮者をこんなふうに呼ぶことがあるが、目の前にいる白髪の男性はまさにそれだった。

団員たちは指導を聞き漏らすまいと楽譜にメモを走らせる。8割近くは50代以上。医師や裁判官、中学校の先生やピアノの先生など普段は「教える」立場の人も多いが、練習に来ることごとくしかられる。通い始めて3年目の安藤正樹さん（57）は前任の北海道でも合唱団に入っていた。「成毛さんは厳しい指摘をされるけど、それに応えていくと音楽が豊かになる。だからみんなへこたれずに通ってくるのでしょう」と話す。

石川出身の成毛さんは、中3の音楽の授業でドヴォルザークの交響曲第9番「新世界より」を聴いて「音楽はこんなに人を感動させるのか」と衝撃を受けた。合唱との出会いは加悦谷高2年の時。「元気が良い女の子に誘われて」創設したばかりの合唱部に入ったという。その後ピアノを習い、進学した武蔵野音大でも合唱を続けた。加悦谷高に赴任したのは1973年。以降38年にわたって合唱部を指導した。成毛さんの練習は限りなく体育会系。音楽室をとび出して階段を上り、腹筋を鍛えるトレーニングを繰り返すのだ。石川混声合唱団の団長、河邊進さん（60）は、成毛さんが初めて指導した部員の一人。「当初は部員の大反発を買ったが、自分たちの声が変わるのに気づいて気持ちを入れ替えた」と振り返る。

形は変わっても 続く伝統

伝説の舞台となった音楽室の壁は表彰状で埋め尽くされ、今も合唱部員が歌う。ただ違うのはマイクを持っていること。部員は現在12人。少子化の影響もあって合唱部の存在感は薄らぎ、80年代に80人近くいた部員は一時3人に減った。合唱部OGの音楽教諭、堀ノ上るり子さん（41）が母校に赴任した2011年当時は14人。コンクール出場にはギリギリの人数だったが、それでも府大会を突破した。しかし部員の負担は大きく、2年前からマイクを使ったアカペラを活動の中心にした。地域の催しなどで毎月公演の依頼があり、部活は忙しい。部長の安田衣桜奈さん（17）は楽しそうに歌う先輩を見て合唱部に入った。今は自分たちの歌を聞いて「今度はどこで歌うの?」と期待してくれる人たちがいる。「しっかり練習しないとって思います」。堀ノ上さんは「伝統の形は変わったけど、ハーモニーを奏でる楽しさを伝えられる場所でありたい」と願う。

石川混声合唱団
毎春の春うららコンサート（次回は4月7日13時半、宮津会館）を中心に活動。石川小のPTAコーラス部から発展し、現在は町内外の約50人が所属。コンサートの度に入団希望者がおり、団員が増えている。

時代は変わり高校生が求めるスタイルも変わりゆく。一方で、成毛さんが半世紀まき続けた「歌の種」は井上さんが小学校に持ち帰り、子どもたちと新たな伝統を築こうとしている。井上さんは町内の児童合唱団エンゼルハーモニーの指導者の一人でもあり、加悦谷の歌のDNAは受け継がれている。

加悦小の子どもたちと出会って、私は小学生の自分を思い出した。彼らほど上手ではなかったけど、何度も練習して一生懸命に歌ったなあ。仲間と声を合わせて一つの音楽を作るのは大変だった。でも、格別に気持ちがよかった。この町の合唱力は財産だ。さあ、あなたも一緒に歌いませんか? あの頃のように。

指揮台の前に立つ成毛さん。腕を上げると合唱団を独特の緊張感がつつむ。「音楽のもとにひとつになる」。そんな言葉がぴったりだ

加悦小直伝 歌のコツ

大きな口で遠くへ

人気のポップスは、テンポが速くて歌詞が多いから言葉が聞き取りにくくなりがちだ。「ほっぺたを両手の人さし指で押して歌ってごらん」と井上さん。口が縦に横にしっかり動いているかを確かめながら、発する声は遠くへ。頭のてっぺんで響かせて声を遠くに飛ばすイメージだ。

加悦小の井上幸夫さん

歌詞の心を知ろう

加悦小では楽譜を引き伸ばして張り出し、歌で何を伝えるのかをみんなで考える。例えば与謝野町音楽フェスティバルで歌った「心から心へ」。「♪分け合おう　僕たちの心のぬくもりを」というフレーズはだんだん声を大きくしていこうと書き込んだ。田村智輝さん（11）は「みんなにやさしい気持ちを分けたいと思った」と話す。

声に「芯」を入れる

あごをひき、のどの奥を開けて、おなかで息を押し出す感じで歌うと「声に芯が入る」。感覚をつかむには「寝転び発声」が効果的だ。おなかに手を当て、へこませて息を押し出すと歌声に迫力が増す。声を出す瞬間に力強さを感じられたらOKだ。小牧花菜さん（11）は「寝て声を出した後に立って歌うと、声が大きくなるよ」と話す。

あなたの絶景

慈徳院ライトアップ　前田 涼介さん

夜空の深い黒と、ライトアップされた紅葉のコントラストがきれいですね。灯籠を下から見上げる構図も、非日常的でとってもすてきです。（編集部）

一緒に歌いませんか

石川混声合唱団
成毛先生の熱意あふれる指導の下、老若男女が楽しく、時には厳しく歌っています。高校生以上対象。
毎週金曜日 20〜22時
石川小学校音楽室
0772-42-3572（河邊）

岩滝混声合唱団
「和気あいあいと楽しくハモる」をモットーに、本格的な合唱曲や親しみやすい曲を歌っています。成人対象。
第1・3火曜日 20時〜21時45分
知遊館 子育てふれあい室
0772-46-4864（大江）

岩滝ジュニアコーラス
かわいい小学1年生から6年生のお兄さんお姉さんまでが仲良く歌う。8月は北部児童交歓演奏会に参加。
年18回 土曜日10時〜11時半
知遊館 子育てふれあい室
0772-46-2451（知遊館）

与謝野児童合唱団エンゼルハーモニー
30年以上続く児童合唱団。3月3日14時、野田川ユースセンターで定期演奏会。保護者も一緒に歌います。
月2〜3回 土曜日9〜11時
中央公民館 2階会議室
0772-43-1157（中央公民館）

シニアコーラス・あそ
文部省唱歌や季節の歌などを楽しく歌います。休憩中のおしゃべりも楽しみ。10月に発表の場も。60歳以上。
年13回 木曜日13時半〜15時
知遊館 子育てふれあい室
0772-46-2451（知遊館）

レディースエコー
身近な曲が中心の、笑いの絶えない合唱団。歌が好きなら誰でも大歓迎。町文化祭などに参加。成人女性対象。
月2回 水曜日19時半〜21時
算所会館、梅谷会館
0772-42-5110（横谷）

チケットプレゼント〜♪

あなたの絶景募集中!　あなたの知っている与謝野町の「絶景」を教えてもらえませんか? すてきなものは「うちのまち」や与謝野町公式SNSに掲載させていただきます。次回のプレゼントは2018年4月7日の石川混声合唱団「春うららコンサート」の4枚組みチケットです。応募はInstagram、Facebook、twitterのいずれかで、与謝野町公式IDをフォロー。それから写真にハッシュタグ「#与謝野うちのまち」をつけて投稿すれば完了です。詳しい応募方法は右のQRコードからどうぞ。お問い合わせは、与謝野町商工振興課（0772・43・9012）へ。

うちのまち 第7号（隔月発行）　発行日：2017年12月25日　企画・文・写真：安部拓輝（毎日新聞社）　編集・写真・デザイン：青柳聡史　ロゴデザイン：田子學（エムテド）　制作：毎日新聞社　発行：与謝野町　ご意見・ご感想、バックナンバーのご希望は、与謝野町商工振興課（shokoshinko@town.yosano.lg.jp、0772・43・9012）へ